

伊東光晴 著

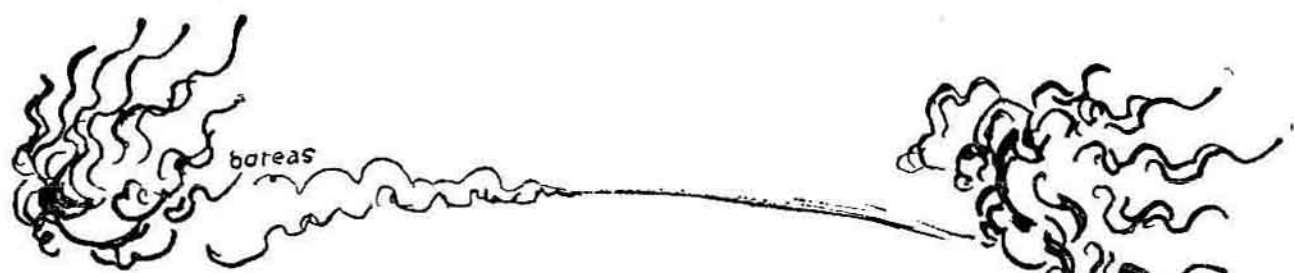
ケ イ ン ズ

— “新しい経済学” の誕生 —



岩 波 新 書

449



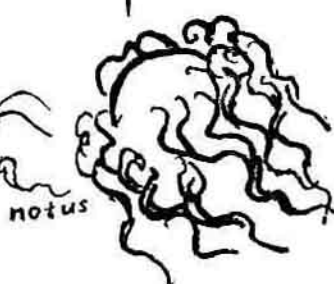
伊 東 光 晴 著

ケ イ ン ズ

—“新しい経済学”の誕生—

岩 波 新 書

449



伊東光晴

1927年東京に生まれる

1951年東京商科大学卒業

専攻—理論経済学

現在—法政大学教授

著書—「コンメンタール ケインズ『一般理論』」(共著)

「近代価格理論の構造」

「現代経済を考える」(岩波新書)

訳書—カレツキ「経済変動の理論」(共訳)

ケインズ

岩波新書(青版) 449

1962年4月20日 第1刷発行 ©

1977年4月10日 第24刷発行

¥ 280

著 者 い 伊 東 光 晴

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

はしがき

経済学の長い歴史をふり返ってみると、いくつかの大きなまがり角があることに気づく。たとえば、アダム・スミスの『国富論』、リカードの経済学の成立、マルクス経済学の出現、一八七〇年代の限界革命などがそれであつた。そして最も新しいまがり角が一九三〇年代、イギリスの経済学者 J・M・ケインズによつてうちたてられた新しい経済学の成立である。

長い間、経済学の正流は、自由競争さえあるならば経済社会は調和ある状態を続ける、ということを論理的に明らかにすることであつた。たしかに古典派経済学の場合には、それは古い勢力に対する批判であつたが、十九世紀の後半以後、自由競争が現実のものとなると、それは何もしないことであり、現実の説明をするだけのものにすぎなくなつてしまつた。したがつて経済学も、その昔、経済学が生まれ出るとき持つていた政治経済学——Political Economy——経済という社会の土台からの政治・政策への批判——から、たんなる Economics に墮してゐた。ところが新しい経済学は、今までの経済学の予定調和観の誤りを経済分析の武器を通して指摘し、国家の政策なくしては失業問題の解決も、不景気の克服も不可能であることを論証した。それは古い経済学に支配された政治を経済という基礎から批判するものであり、イギリスの経

済学史家エリック・ローがいったように、長い間忘れられていた政治経済学の復活であった。しかし新しい経済学が社会的に根をおろす過程はけっして平坦な道ではなかった。第一線に活躍している政治家も実業家も、実は過去の経済理論の奴隷である、ということわざもあるが、ケインズ経済学の登場は、それが、政治経済学であればあるほど、古い政治家や実業家の通念との摩擦をひきおこした。それはイギリスだけでなく、アメリカでも日本でも程度の差こそあれ同じであった。そしてこの新しい経済学が古い通念にとって代るにつれて、現実の経済社会も、同じ資本主義でありながら大きな変化を見せはじめた。

こうして、経済理論上の革命、経済思想と経済政策の変化、資本主義の変貌の意義の大きさは、「ケインズ経済学の出現以前に経済学者として生を受けていた者にのみ知ることができ、幸であり、しかもその出現の時、新しい理論を受け入れることができる青年であった者のみ理解できる特権である」といった人もいる。

わたくしは、このような特権を少しでも自分のものとするために、ケインズ経済学の生誕の背景である一九二〇年代から三〇年代にかけてのイギリス資本主義に目を向け、この危機に処する伝統的経済学の政策と、ケインズの政策との対立を、ケインズ自身に内在してえがいていこうと努めた。

ケインズは「イギリスにとって真理であり叡知であったものを、資本主義国どこにでも当て

はまる真理であり、叡知であるものに高めた」といわれている。かれは、植民地帝国主義国家としての老大国イギリス特有の三つの階級の利害抗争をもとに新しい経済理論と政策をつくった。この点についてわたくしは、ケインズ理論と伝統的理論の対立がイギリスにおいて持った意味として、海外投資を中心とする資本と、国内産業に関係する資本の利害抗争という視点を押し出した。このような見方は、植民地に根を持つ資本と国内に根を持つ資本との利害抗争のうちに、イギリス近代経済学の対立と発展の歴史を追うという、故杉本栄一教授から与えられたわたくしの研究テーマのひとつであった。

と同時に、イギリス経済思想史上のものとしてケインズを見る場合、今まで経済学を支配してきたベンタム主義的思想の否定の上にその理論が築かれたという点も、今までともすれば無視されていた点であり、このことを強調したのが本書の第二の特徴である。この点については宮崎義一氏から多くのことを学んだ。

そして第三の特徴は、新しい資本主義をつくり出す武器としてのケインズ理論という視角を強調したことである。経済の学という名のもとに、たんに現実を説明するにすぎない経済学が盛隆している時、現実を変える学問という意味での経済の学であるケインズ経済学を通じて、現代資本主義の真の動きをいろいろの立場の人に——ケインズ主義に反対するマルクス主義者は勿論のこと、近代政治学・大衆社会論に興味を持たれる人たちにも知ってもらいたかったか

らである。この点は都留重人先生の直接、間接の影響である。

いずれにしろ、ケインズ自身とかれの主著『一般理論』に即して新しい経済学の生誕を歴史的背景のなかでとりあげ、あわせて『一般理論』そのものを紹介するのが本書のねらいである。最後に、友人浅野栄一君は本書を原稿のうちに読み多くの助言を与えてくれたこと、また本書の出版は、牧野純夫氏の強いすすめと岩波書店の加藤亮三氏のおかげであることを記して、感謝の言葉にかえさせていたたく。

一九六二年三月一九日

伊 東 光 晴

目次

はしがき

序説

I 三つの階級・三つの政党

——ケインズの階級観——

チャーチルとケインズ(二三) 一九二〇年代の経済問題(二三) 三つの問題(二六)
三つの階級(二八) 金本位制復帰はいかなる階級への利益をもたらすか(三二)
海外投資の変質(三四) ケインズの提案(三〇) 三つの政党(三三) チャーチルの
経済的帰結(三五) ケインズと政党(三九) ケインズ理論の中核(四二)

II 知性主義

——若き日のケインズ思想——

III 新しい経済学の誕生

1 新しい現実 古い理論

マーシャルとケインズ(四八) ソサエティーとその思想——ベントム主義への批判と叡知主義(五〇) ブルームズベリー・グループ——若い芸術家の集団(五五) 知性主義の二側面——ケインズの人間観(五九) 自由放任主義批判(六四) 投機家ケインズ——フロー分析からストック分析への転換をもたらしたもの——(六七) ケインズの結婚(七〇)

2 『一般理論』の骨ぐみ——(i)

新しい労働市場分析(九六) 有効需要の原理とセー法則(一〇三) 社会全体の生産量はどのように測るか(一〇六) 消費性向と有効需要の原理(一〇七) 投資と貯蓄との関係(一二〇) 乗数理論(一二三) 乗数理論の実践的意味(一二七) 伝統的な金融市場批判(一二〇) 結合のあやまり(一二五)

3 『一般理論』の骨ぐみ——(ii)

利子は何に対する報酬か(一三八) 利子率の高さはどうしてきまるか(一二三) ケ

インズ利子論のビジョン(二三六) 資本の限界効率と投資の決定(二四三) 『一般理論』の要約とケインズの政策(二四五) ケインズの戦争観(二五〇) ケインズは平和主義者であったか(二五三) ケインズはインフレ主義者か(二五四) 貯蓄は美德か(二五八) ケインズの資本主義観(二六二)

IV 現代資本主義とケインズ経済学

投資決定論の修正(二六八) ケインズの見なかったもの(二七二) ケインズ主義の二つの流れ(二七四) ビルト・イン・スタビライザー(二七八) 新しい労資関係(二八三) 新しい病い(二八四) 戦後の国際通貨制度——ケインズの最後の努力(二九二) ケインズとマルクス(二九五)

ケインズ経済学をより深く学ぶために

投資と貯蓄との関係(三〇二) 『一般理論』の解説書(三〇七) 『一般理論』とケインズの周辺を知るためのもの(三二〇) ケインズ経済学の発展を学ぶためのもの(三二二) ケインズの著書(三四)

序 説

ニュートンといえは近代科学の生みの親の一人であると思われる。しかしかれはひそかに錬金術にこり、中世的な教義の間をさまよった最後の科学者であるという正反対の評価をする人もいる。フォードを、アメリカを代表する有能な経営者と考える人もいれば、ハーバード大学の経済学教授ガルブレイスのように、無能な経営者にすぎなかったという人もいる。いわんや、ピカソについては、専門の評論家の間でも、二〇世紀を代表する芸術家という人もあれば、いかさまと見る人もいる。一人の人間に対する見方はこのように千差万別なのが普通かもしれない。

経済学者でありながらニュートンのなかに中世錬金術師の最後の一人を見出して、通説にあえて異をとらえたJ・M・ケインズ(John Maynard Keynes)その人に対しての評価も同じである。ケインズという名を聞くだけで嫌悪の情を示す実業家はアメリカにかなりいる。ケインズの名によっておこなわれる政策が、自由な企業の活動をおさえるからであろう。アメリカの実業家の団体のなかには、補助研究金を出して反ケインズ派を援助し、ケインズを左翼的、社会主

義的と攻撃している人たちもいる。しかしマルクス主義者からは、反対に、かれはブルジョア経済学者と呼ばれ、金融資本の利益を代表しているともいわれたり、また今どき、かれのように利子引下げという、金融資本に反対するようなことをいうなどは、小ブルジョアの考えにすぎない、ともいわれてもきた。そのほか、ケインズに対する評価は絶讃からはじまって、変節漢にいたるまで、あるいはアダム・スミスに匹敵する経済学者から逆にペテン師にいたるまで、多種多様である。

一八八三年、イギリスの大学都市ケンブリッジに生まれ、一九四六年、六二歳で死んだこの経済学者に対するいろいろの評価にもかかわらず、かれが、象牙の塔に立てこもる講壇経済学者でなかったことだけはすべての人の認めるところである。ケンブリッジ大学の教師でありながら、すすんで社会に出、自分の主張を訴え、政治に関係し、論敵を攻撃し、自分の意見と異なる場合には、政府の委員を辞して批判の書をあらわしたり、時の首相を駁論したりした。あるいは、このような人間であったからこそ、前述したようないろいろの評価を受けたといってもよいのかもしれない。かれはつねに自分たちが住んでいる経済社会の問題点は何であり、その問題のために経済そのものをどのように変えていかなければならないかを求めていくという意味で「経済」の学者であった。それは過去の偉大な経済学者といわれた人々——たとえばア

ダム・スミス、デーヴィッド・リカード、そしてカール・マルクスなどと同じである。これらの人たちは、社会が大きく変化しようとしている時代に生まれあわせ、その変化をおし進めるために、それを阻止している古い考えと古い政策、そして古い政治を批判し、新しい社会を生みだすべく、経済学の理論をそのための武器としてきたえあげたのであった。ケインズもまた同じであって、今世紀以来衰えてゆくイギリス社会と、第一次大戦以来ゆるぎだした資本主義経済とともに歩み、その変質のために処方箋を書き、しかもその処方箋が資本主義そのものの変化を可能にしたという意味で、ひとりの偉大な「経済」学者であつた。

かれは、現実をいろいろの意味で変えた。

かれは過去百年間、正しいと考えられていた自由放任主義を批判した。国家は経済に干渉せず、税金のかからない安上りの国家であるべきだという考えをうちたおして、公共投資や政府による景気振興策の重要性をといた。財政政策にしてもその学説の出現以後、国の予算はたえず収入と支出が一致しているべきだとする均衡財政政策から、必要に応じて赤字にしたり黒字にしたりする伸縮財政政策に変わった。できるかぎり何もしいことを理想とする夜警国家から福祉国家へと変つた。そしてこれらはみなケインズの理論を支えとしているのである。

またケインズは貨幣制度を変えることにも努力した。「此券引換ニ金貨拾円相渡可申候也」

と書かれていた日銀券からこの文字がきえてしまったように、過去百年間なんらかの形で金と結びつき、金の価値で支えられていた貨幣が、この金本位制を離れて、管理通貨へ変ったとき、積極的にこれを進めたのはケインズであった。

第二次大戦後の経済は、第一次大戦後のように大きな不況を経験していない。資本主義経済のなかに、景気を自動的に調節するようなメカニズムが制度としてはめこまれたためである——ビルト・イン・スタビライザーといわれている——しかし戦前の不況に変わって、アメリカもイギリスも、今までの考えでは説明のつかない静かなインフレーションという病気が生れだした。——このような資本主義の変貌とケインズの経済学とはけっして無関係ではない。

ケインズ経済学のこのような性格は、マルクス経済学者も無視することはできない。たとえば、第二次大戦後、マルクス経済学者は何度となく、恐慌がくることを予想した。しかしそのいずれも当らなかった。恐慌がくるぞと幾度もいわれ、ことごとくがはずれたために、それは“万年恐慌論”といわれるほどになった。かつて唯一人、一九二九年恐慌を予言したヴァルガの予想も今度は当らなかった。なぜ当らなくなったのであろうか。その最大の原因は一九二〇年代と現代とで経済そのものが変ったためであり、その変化にマルクス経済学が対処していなかったためではないだろうか。だからこそ、現実そのものの変化の方向を知るために、

現実を変えるための新しい武器となったケインズの理論を研究しなければならない理由がある。それは他の近代経済学者シュンペーター、ヒックス、ワルラスのような書斎だけのものではないのである。

そしてこのような武器となったケインズの新しい経済学は、かれのケンブリッジでの若き日の思想に支えられ、一九二〇年代のイギリス経済の苦闘のなかから芽生え、一九三六年にあらわされた『一般理論』によってもたらされたのであった。

もちろんかれが変えたのは現実だけではない。経済学者とその理論をも変えたのである。

ケインズの名著『雇用・利子・および貨幣の一般理論』があらわれたときの影響を、アメリカの代表的な経済学者サムエルソンが形容した有名な言葉がある。『一般理論』はちょうど南海の孤島の人たちを悪疫がおそろうようないきおいで、三五歳以下のたいていの経済学者をおかしていった。五〇歳以上の経済学者はまったくその病気に感染しないことが明らかになった。

この両者の中間にある経済学者は、たいていじよじよにその熱病におかされはじめたが、自分たちの病状にきづかずにいるか、あるいは病気にかかっていることを認めなかった」と。このようにケインズの『一般理論』はたちまち若い人々を席捲して、古い伝統的な経済学をうちたおした。そしてそれは「新しい経済学」とよばれ、また革命にたとえられて「ケインズ革命」

とよばれるようになった。経済学の体系はこれによって大きく変った。

イギリスの経済学の大きな流れは、アダム・スミスによる古典派の生誕から、リカードの体系化、そして一八七〇年代の近代経済学の成立について、もうひとつ大きな道標をケインズによって打ちこまれたのである。しかもケインズの社会的な影響は、近代経済学の成立期のような経済分析の方法だけの革命ではなかった。それは経済学者を変えただけでなく、政治家、実業家その他の人々を変え、しかも多数の追随者を見出した。それは経済学史上のたんなる学派ではなかった。それは「一人の主人と一つの教義に忠誠を誓う一群であり、仲間と宣伝屋を持ち、また合言葉と秘伝と、わかり易い教義をもっているものであった。さらに正統派ケインズ主義のまわりにも、同情者が広く縁どっており、さらにそれ以外でも、いろいろの形でケインズ派分析の一部の精神を、あるいは個々の項目を、あるいはしぶしぶと、身につけているひとがたくさんいるのである。これに比較することのできる例は、経済学の歴史上ただ二つ——重農主義とマルクス主義——しかない。」これはケインズに同情的でなかったシュンペーターの言葉である。

ケインズの影響は思わぬ所にまで及んでいる。最近『現代の資本主義』という本をあらわして資本主義の変貌を問題にし、国際的に話題をまいたイギリス労働党の理論家、ジョン・ストレチーは、一九三六年までマルクス主義者であり、E・H・カー、ラスキーとともにマルクス

主義をイギリスに紹介してきた一人とされているが、一九三八年『一般理論』を読んでマルクス主義を離れたといっている。反対にJ・ロビンソンは労働党に近づき、労働者のテキストとしてケインズ解説書を書いている。ケインズの影響は、その後継者によって、あるいはイギリス労働党に、あるいはアイゼンハワー治下のアメリカ共和党の政策にしろしらすのうちに入りこんだ。

このようなケインズ理論の誕生はケインズ一人だけによってもたらされたものでないことも重要であろう。ケインズの新しい考え方は、ケインズを中心としたケンブリッジ大学の経済学者——たとえばR・F・カーン、J・ロビンソン夫人、R・G・ホートリー、R・F・ハロッドなどによって共通の財産として生み落された。その芽生えは一九三三年ごろから各人各様の形であらわれている。いやそれだけではない。ポーランドの経済学者、M・カレツキも、マルクスの理論からの影響をうけながら、同じ時に、まったく独立に別方向から同じ理論に到達している。これらのものは現在、すべてケインズの名声の下に統合されているが、新しい理論が、同じ時代にいろいろの形であらわれることは、歴史の偶然以上のものである。生まれるべくして生まれたというなんらかの理由があったに違いない。